

# 医療タイムス

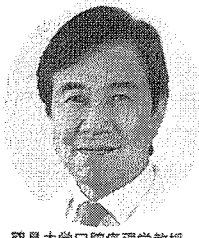
週刊医療界レポート

2009.10/26 No.1938

大学情報

横浜市の鶴見大学が「歯髄細胞バンク事業」を始動

年間約1000万本も廃棄される抜去歯を用いた再生医療プロジェクトが動き出した。横浜市の鶴見大学歯学部の齋藤一郎教授（口腔病理学講座）・病院長は



鶴見大学口腔病理学教授・病院長の齋藤一郎氏

株式会社再生医療推進機構（大友宏一社長・本社：東京都中央区）と連携し、抜去歯骨髄を活用する「歯髄細胞バンク」事業を本格始動する。齋藤教授はこれまで岐阜大医学部と続けてきた一連の共同研究から、歯科医院で医療廃棄物として処理される「親知らず」や、幼児期に役目を終える「乳歯」に含まれた歯髄細胞が再生医療の早期実現に極めて理想的な細胞であることを明らかにしてきた成果を産学連携で事業化するもの。歯髄細胞は、①胚性幹細胞（ES細胞）のような倫理的問題もないこと、②骨髄細胞のような採取時の外科処置も不要、③出産時にしか採取できない臍帯血（年間出産数約100万人）と比べ、歯科治療に伴い本来廃棄してしまう抜去歯数は年間1000万本以上と推測され、臍帯血の10倍以上の採取チャンスがある—などの利点<sup>があげられる</sup>。抜去歯に含まれる歯髄細胞は増殖能力が高く、再生医療に必要な細胞数が十分得られることや、細胞の老化や染色体の異常が極めて少ないことから、他の細胞と比較して理想的な細胞ソースであると結論付けられた。これまでの研究で、歯髄細胞から再生可能な組織は骨、神経、歯牙組織などであることが明らかになっている。また、この事業化が進むと歯科界の活性化につながることも期待されている。